

まえがき

ころというはたらきの不思議さへの疑問は、遠い昔に古代文明を創り出した時代の人たちにとっても、今日の私たちはもちろん、これから未来の時間を生きる人々にとっても、人類が存在し続ける限りは共通して抱き続ける本質的な命題である。人類はこれまでに、「ころとは？」という素朴ではあるが人間の根源に関わるこの疑問を解き明かそうと、それぞれの時代において、それ以前には誰も思いつかなかった新しい見方や研究の方法を編み出し、それらを実際に使うことで、ころの実体に迫ろうと挑戦し続けてきた。そして、これは今という時代へと引き継がれている。先人たちの挑戦の歴史の中でもたらされた人間の生命に関わる種々の物質や法則の発見、知的創造活動を経て生み出されたころや脳を扱う思想、概念、規範、知識など、そしてこれらを応用した技術という果実を、後世の人間が受け継ぎ、それぞれの時代に応じて修正改良を積み重ねることで、さらにそれを深めてきた。結果として打ち立てられた多彩な学問分野は独自の視点に立ち、探究しようとするものの中味を吟味し掘り下げ、それぞれの守備範囲において高い専門性を作り上げてきている。

人類史において、前世紀は工業革新の時代といい切っても間違いのないと思う。その原理的な基盤を与える理学と実際的な応用を目指す工学に関連した諸分野の発展はいうに及ばない。この間の科学技術の進歩は、公私を問わずある面では確かに人間の生活を飛躍的に向上させた。しかし、一方で人と人との精神的つながりや交流の希薄化、新しい社会システムから受ける精神的抑圧など、深刻な社会問題を新たに生み出している。しかも人類が直面する複合課題は、無論これだけに留まるはずもない。このような現代に生きる私たちにとっては、専門細分化され先鋭化した各分野の範囲にこだわることなく、それぞれが培ってきた知識を互いに持ち寄り、垣根を越えたところで「ころとは？」の問題に改めて立ち向かわなければこの複合的な問題の解決はないように思う。本書は、このような考え方を基本に、これまで進めてきた感性を含めたころについての研究と教育の活動を、基礎から具体的な応用にわたってできる

だけ平易に解説したものである。本書を通して読者に、「学際的研究」の必要
性とそれを実践することの難しさを理解してもらえれば幸いである。そのよう
な理解が人々の間に少しでも広がることを願ってやまない。

平成 25 年 8 月 10 日

久野 節 二